

大友宗麟、主な足跡とその後

父から将来を嘱望

1530年1月3日(5月4日とも)、義鎮は義鑑の嫡男として府内館で生まれる。幼名・塩法師丸。母は坊城氏(大内義興の娘説あり)。幼くして聰明。しかし虚弱体質のゆえか集中力がなく、行動は我が儘と取られることが多かった。

父義鑑は、塩法師丸が6歳のころ足利將軍家に跡継ぎ(菊童丸・義輝)の誕生祝に塩法師丸の名で祝儀を贈る。以降ことあるごとに義鑑は塩法師丸名で將軍家に献金、それほどに塩法師の将来に期待していた。そして10歳で元服、五郎義鎮と名乗る。

◆父を諫言／義鎮16歳のころ、父義鑑が中国人から沖浜に停泊中の船のポルトガル人乗組員を殺せば労せずして財宝が手に入るとそそのかされたのを知り、父に諫言、止めさせる。

その頃、義鑑の側室の男児塩市丸が3歳で、これまた聰明な子だったようで義鑑は溺愛していた。

二階崩れの変で家督継承

1550年2月、20歳になった義鎮が別府に湯治中に父義鑑は重臣に、塩市丸を跡継ぎにすると告げた。反対した重臣4人のうち二人は誅殺された。それを知ったあと二人は夜中館に乱入、義鑑に重傷を負わせ、翌々日死亡。側室以下塩市丸や侍女等殺害、府内は大混乱に陥った。

別府で報せを受けた義鎮は沈着に行動し乱を鎮めた。この事件の黒幕は重臣で自分の守役であった入田親誠とし、その後阿蘇まで逃げた親誠を舅の阿蘇惟豊が誅罰した。

◆ザビエルに会う／1551年8月、山口にいたザビエルを招き、ザビエルが説くキリスト教やその生き方に感銘を受ける。義鎮の人生はザビエルによって決定付けられたといつても過言ではない。

◆日本初の欧洲外交／ザビエルの帰国に際し、ポルトガル国王に新書(インド副王にも)と贈り物を託した。その後返礼の品がインド副王から義鎮に贈られ、さらにポルトガル国王からも豪華な返礼品が届いた。

相次ぐ謀叛事件を収める

1556年までの約6年間に二度の大謀反事件が起こる。1553年1月、3人の重臣が謀反を起こすも誅した。二度目は1556年5月、重臣同士の争いを発端に府内が大騒乱に巻き込まれ、生命の危険を感じた義鎮は臼杵丹生島に避難した。これより丹生島城の整備にかかる。

1555年、アルメイダが府内に日本初の育児院を設立する。豊後のキリストン1500名になる。

◆日本初の博愛病院／1555年、宣教師に与えた土地に建てた病院は、二つの病棟に分けられ、一つはハンセン(ライ)病患者専用、もう1棟は種々の病気の患者用であり、アルメイダが治療した。こ

の噂は日本中に広まり都からも患者が来るようになった。同じころルカスという教名の老キリストンが朽網(直入郡長湯)に立派な教会を建てる。前後して府内にも協会が建った。

◆大友義鎮の貿易船が焼かれる／当時、明政府は貿易を認めておらず、王直という倭寇の頭目は松浦党などを使い密貿易を行っていた。明政府は使者・鄭舜功をよこし、中国沿岸を荒らす(密貿易)倭寇の取り締まりを義鎮に申し入れた。その後、貿易の許可が下りたということで王直に任せ派遣したが、かの地において密貿易船と見なされ、焼き討ちに遭い王直が殺された。この事件は貿易を独り占めにしたいポルトガルによるものではないかという。

対毛利13年戦争

1557年4月、宗麟弟の大内義長を殺した毛利元就は豊前への進出を図り度々侵攻を企て、1570年までの十数年間、大友・毛利のし烈な争いが続くようになる。

◆九州探題に任じられる／1559年11月、度重なる献金が功を奏し、豊後・豊前・肥後・肥前・筑前・筑後六ヵ国の太守となり併せて大内家督も得る。武力に寄らず平和的手段ということで宣教師には好印象。

◆入道(出家)し瑞峰院宗麟誕生／相次いだ謀反事件の原因は、①同紋衆優遇と②宣教師の優遇にあると考えた義鎮は、1562年5月、入道し宗麟を名乗る。そして臼杵の丹生島城に移り、しばらく宣教師を遠ざける。宗麟の胸中は必ずしもデウス一辺倒ではなく、禅宗も極めたいという気もあった。

◆結束する家臣団／九州の霸者となつた大友宗麟を支えたのは優秀な家臣団である。不平分子を取り除き、戸次鑑連、臼杵鑑速、吉弘鑑理(豊州三老)を中心に、吉岡長増、田北鑑生、そして志賀親守、田原親宏らであった。三老の戸次は軍事、臼杵は外交、吉弘には経済を担わせるといったような特長があった。

◆ヨーロッパにはどのように伝わっていたか／1551年にトルレス神父は日本人の性格を次のように報告をしている。

日本人は分別があり理性によって行動する。まるで宮廷に育ったかのような態度で、他人を妬まないし悪口を言わない。賭博や泥棒をした者は殺される。気晴らしは武道の鍛錬であり、13、4歳で帯刀し、非常に熟達している。一方で詩句を嗜む。また、名誉を重んじ、非常に厳格である。そのため周囲の他国民をほとんど問題にしていない。身分を尊重し、主君は家臣に絶対服従を強いる。

日本人は好奇心が強く、靈魂に関しては議論を好む。日本人からしてみれば「知識と名誉」という点では自分らに勝る国民は存在しない。貧乏は恥ずべきことではなく名を残すことが名誉と考える。

◆宗麟についてフロイスは自著『日本史』で宗麟が死ぬまでの見聞を次のようにまとめている。

「全日本の異教徒の国主にして彼ほど心からデウスの教えを愛し理解し、我々司祭やポルトガル人に多大な愛情を示し、庇護した者とてはいなかった」。半面、若いころの宗麟に対し、禅宗にも帰依し、根本からデウスの教えを知ろうとしないのが不可解だとも述べている。

※宗麟自身は、禅宗にもキリスト教にも関心を寄せ、真理を追究していた。しかし、対毛利戦が続いた十数年間は貿易による軍需物資の調達のための方便だったこともまた事実のようだ。

◆海外貿易で得た利益は、病院建築や各寺院建立、町の整備などいわゆる社会資本にも投下したが、もっと多く使つたのは幕府への献金だった。九州六ヶ国の守護職獲得は、つまり金で手に入れ

たもの。しかし実力(戦)で勝ち取ったものではないということは、人殺しを避けて名誉を手にしたわけで、平和主義者であったと解釈できる。フロイスもそのように述べている。

◆現代に残る西欧の文化／宣教師がもたらした当時の物や文化は現代まで様々な形で残っている。カステラ・合羽・コンペイトウ・グラス・ビードロ、カボチャ等の品々。西洋医学、西洋音楽、ボランティアの概念の文化面の移入。象や虎、孔雀など珍しい動物などをもたらした。

◆豊後各地にヨーロッパが再現／1555年から病院や協会が建てられはじめ、1580年代になると臼杵にノビシャド(修練院)、府内にコレジョ(学校)が開設され、貿易船の停泊地沖の浜を含めて府内の町をポルトガル人や黒人、中国人などが往々交う様は、まさに国際都市の観を呈していた。

対毛利終戦後は大友文化が花開

1561年以降、筑前と豊前各地で毛利との戦いに明け暮れていた。その間、織田信長が和平仲裁に骨を折り、お互いに贈り物の交換(宗麟からは銘盆、信長から名馬)をしている。

1569年、毛利軍が総力を挙げて北九州に侵攻していたガラ空きの山口を突くという奇襲作戦を敢行した。慌てた毛利軍が引き返し、それを機に、以降は毛利が豊前筑前侵攻をあきらめた。それから1578年、理想国家建設を目指して日向侵攻を試みるまでの7、8年間が大友家の全盛時代で、九州北部の太守たる大友王国の時代が到来したのである。

◆九州各の大名たちが府内に参府／毎年正月、江戸幕府の参勤交代よろしく、年賀には九州各地から大名たちが府内の大友館を訪れ、宗麟に年賀のあいさつをした。そのために豊後各地を治める家臣団は地元の特産物を献納した。山間部の家臣に対しウサギやキジなどの山の幸。海辺の家臣には佐賀関のタイやアワビなど海の幸。宗麟はことのほかアワビが好物だったようだ。また、豊予海峡の高島に別荘があり、臼杵や津久見湾で捕鯨に興じたというエピソードも伝わっている。さらに、臼杵氏や一万田氏など重臣の館にも足を運び、花見や能なども催した。

◆府内の二大祭り／大友氏が豊後定住以来崇拝してきた柞原八幡宮の放生会と古国府の祇園社の祭りは、大友総領家の当主が必ず参列しなければならない重要行事であった。特に柞原の放生会は、四国や西日本各地からやって来る2、3万人の群衆でごった返すほどの賑わいを見せた。宗麟を中心に上級家臣の棧敷が設けられ、本宮から生石浜(かんたん)の下宮までの行列は人々の目を楽しませた。

◆居並ぶ大名たちよりも宣教師を優先／ある日、ある問題を相談しに宣教師が府内館を訪れた。謁見の間で各地の武将に応対していた宗麟はすぐ自室にその宣教師を招き、居並ぶ大名たちを待たせ数刻も話に興じた。

◆エステバン事件で、信仰は自由と語る／1570年代は、政治的に安定していたが家庭内では宗教問題で大騒動していた。宗麟夫人とその兄妹の田原紹忍親賢は、キリスト教に強く反対しており、宗麟の宣教師に対する態度を苦々しく思っていた。宗麟は10歳になろうとしていた次男親家を僧侶にしようと京都大徳寺から高僧・怡雲宗悦を招いて臼杵に寿林寺を建立したが、親家はキリスト教になると言い張った。同じころ、久我三久に嫁いだ宗麟の次女に仕えていたエステバンというキリスト教の少年がいた。彼は寺の護符を受けて来るように命じられたが従わなかった。これを宗麟夫人が問題にした。長男である義統もキリスト教に好意を寄せており、次男親家も同様。おまけに娘に仕える少年まで

もが主人の命令を無視するようでは家中に示しがつかないと彼を殺すように宗麟に訴えた。宗麟は動じることなく「信仰は個人の自由意思に任せるべきだ」と応じなかった。

デウス旋風の中で

宗麟夫人の兄妹・田原紹忍は先ごろ都から柳原という公家の子を養子に迎えた。大変頭の良い子でしかも美少年、周囲から大変羨ましがられていた。ある日、紹忍は興味本位で臼杵の教会に連れて行った。親虎はたちまちその魅力に取りつかれ当初は内緒で教会に通っていたが、そのうちキリスト教になりたいと公言するようになった。激怒した紹忍と宗麟夫人は教会を焼くと宣言、実力行使に出ようとした。宗麟は自分が介入すると騒ぎがもっと大きくなると田原紹忍には厳重注意のみで静観した。しかし紹忍は親虎を廃嫡した。

◆義統、父・宗麟を語る／嫡子の義統は父を尊敬しており、宗麟の行動をすべてお手本にしていた。デウスに関する父の考えに同調し、宣教師に保護を加えた。1578年7月、宗麟が受洗し日向に侵攻すべく臼杵を発った後フロイスとともに野津に駐屯、デウスの教えに没頭していた。ある日、フロイスの部下、日本人修道士ダミアンとの話のなかで義統は宗麟の思い出を語った。

「**予の記憶では、父は女性に関し、母一人で満足していた。**私は父と違って、荒んだ少年時代を過ごしてきた。これからはキリスト教となり、父の学殖に学び将来父を超えるような人間になりたい」と。さらに「かねがね私の想いを伝えていた女性がいたがまったくその思いが叶えられなかった。ところが先日、彼女から誘惑の手紙が届いた。でもデウス様のおかげで、手紙が以前の自分に戻すことがわかつたので取り合わぬことにしたのである」と語った。

◆ドン・フランシスコ／27年前にザビエルに会って以来、キリスト教に心を示しつつ禅宗にも帰依し真理を追求してきた宗麟は、家督を義統に譲り自由の身となった今、自分の生き方に結論を出した。1578年7月カブラルにより受洗しフランシスコと名乗った。その前、ほぼ30年間連れ添った奈多夫人と別れ、夫人の侍女頭であった女性(ジュリア)と結婚した。受洗したその日宗麟は「周囲の景色がまったく違ったものに見え、自分自身の人格も変わったように思えた。すべてが初々しく生まれ変わったようだ」と語っている。

一炊の夢に終わった理想国家

宣教師の説く世界こそ自分の理想国家だと信じた宗麟は、しがらみのある豊後国内での建設をあきらめ、日向・延岡にその地を求めた。折よく、縁戚である日向の伊東三位入道義祐が島津に追われ亡命していた。伊東の旧地を奪回するという名目を立て延岡に侵攻したのだ。真意はもちろんキリスト教による理想国家建設であった。

◆惨敗した日向遠征／1578年11月、総勢43,000の軍勢で日向に侵攻した。「平和のための戦争は必要悪」というのは現在の世界でも“聖戦”という理屈で存在する。宗麟はキリスト教による理想国家建設を夢見て遠征軍を起こしたのだが惨敗を喫した。原因は、ほとんどの重臣の反対を押し切り、腹心・田原紹忍一人のみの賛同で、内部がバラバラのまま行動したことである。加えて前線の指揮を重臣たちから総スカンを喰っていた彼に全権委任したのがその主原因である。

天正少年遣欧使節団派遣

1582年、司祭ヴァリニヤーノの発案で伊東マンショら4人をローマに送り、日本人をヨーロッパに紹介した。教皇をはじめローマ市民は熱狂的に歓迎したという。宗麟は計画が決定した後説明を受けたらしい。名目は、大友宗麟や有馬晴信や大村純忠らキリスト教徒が派遣したことになっている。
※ヴァリニヤーノが日本での成果を本国に知らしめるためのものであった。

島津の豊後侵攻で秀吉に救援依頼

◆敬虔なキリスト教徒／完全に家督を譲った宗麟はますますキリスト教にのめり込み、キリスト教の頭として津久見に隠棲、延岡の無鹿で果たせなかつたキリスト教徒国家を津久見で実現しようとした。しかし、義統の統治能力に不安を抱いた重臣たちの懇請で心ならずも政治に復帰、義統の後見として再び政治に関与することになった。

日向の敗戦で義統は宣教師との付き合いを徐々に減らし、やがて関係を断ち、自領内のキリスト教徒を迫害する方に変節してしまうのである。これは母親と(伯)叔父である田原紹忍の影響であった。

宗麟が惨敗を喫したのをみた豊後国内の反田原紹忍の南郡衆や筑前、筑後の国人衆が反大友の旗をあちこちで挙げる。

◆島津の北進／こういった北部九州の動きを察知した島津は1586年北侵を開始した。その情報を得た宗麟は大坂城の豊臣秀吉を訪れ救援を要請した。秀吉は快諾し、仙石秀久を大将とした四国連合軍の派遣を約束した。

島津軍は肥後南部の相良や竜造寺を破り、筑後・筑前の大友方武将を次々と下し、ついに豊後にも侵攻してきた。豊後の各武将は降参したり寝返った者も多くいたが岡城の志賀親次と佐伯梅群城の佐伯惟定は最後まで抵抗した。豊後で落ちなかつた城は、その二城と宗麟の臼杵城のみであった。しかし島津軍は大野川で四国・大友連合を破り、府内を蹂躪、神社仏閣など町ごと焼き尽くし、豊後人を大量に捕虜とし、他国に売却したり、狼藉の限りをつくした。

◆秀吉は大友義統に豊後を安堵、宗麟には日向の国を与える／豊臣秀長軍が1587年3月に豊後に到着すると島津は撤退をはじめ、わずかに残つた大友軍と共に島津軍を撃退した。

戦後、島津に最後まで抵抗した二人の若武者佐伯惟定と志賀親次の二人を秀吉は激賞し、日向国のうち各々1城を与えるとしたが、宗麟が断つたためにその話も立ち消えになつた。

立花宗茂、豊臣の家臣となる

そのように秀吉の九州征伐により島津は降伏、やつと九州の戦乱が収束する。秀吉は島津討伐に肥後路を進んだが、その軍の中の立花宗茂の働きに目を止め、その武将としての器量にほれ込み、自分の家臣とした。立花宗茂は高橋紹運の実子であり、立花(戸次)鑑連の婿養子である。この時をもつて宗茂は、大友家を離れ豊臣の家臣となつた。

筑後柳川藩の立花家は、大友一族で唯一江戸時代の大名として命脈を保つのである。

◆宗麟、58歳の生涯を津久見で閉じる／1587年5月23日(天正15年)に没してそれからほぼ1か月後に秀吉は宣教師追放令を出した。まるで秀吉は宗麟が死ぬのを待っていたかのよう行動した、ともとれる。それを知ることなく死んだ宗麟は幸せだったと言えなくもない。

◆その後豊後国はどうなったか／嫡子・義統は島津侵攻の際に島津に味方した自分の家臣である豊後の各領主はもちろん、消極的態度をみせた家臣にも容赦なく誅伐を加え、その所領を自分のものとし以前より所領＝収入が増えたという。1588年3月、上坂した義統は秀吉の奏請で従五位下に叙せられ、“吉”の偏諱を賜る。

1592・3年の朝鮮出兵・文禄の役では黒田軍に組み込まれた大友軍6000を率いる吉統は、敵前逃亡の罪を問われ秀吉から豊後国を没収された。ここに大友氏四百年の歴史は幕を閉じることになった。その後、こともあろうに吉統は宿敵だった毛利氏にお預けの身となった。さらに信じがたいことに毛利の誘いに乗ったのが名門大友氏の運命を決めてしまったのだ。

◆石垣原の合戦／1600年(慶長5年)9月13日、大友家再興を願う大友吉統は、黒田官兵衛如水との約束を違え、相争うことになった。その結果吉統は敗れたが、如水の家康への嘆願により助命された。その子孫は江戸幕府の高家として明治まで存続した。

※高家とは、幕府の朝廷からの勅使の接待役で室町時代以来の名門の家柄に限られた。大沢・武田・畠山・大友・吉良など26家。

宗麟の横顔

◆やさしさと理不尽さを併せ持つ性格の一端を表すエピソード

- ① 家臣の裏切りに対し甘い。佐伯惟教の謀反を許し、加判衆にまで登用した。高橋鑑種の謀反を二度も許した。
 - ② 田北紹鉄の謀反を讒言説があったにもかかわらず詮議せず、讒言を信用して討った。
 - ③ 十字架に不敬(小便をかけた)を働いた領民を即打ち首にした。それは、詮議に時間をかけるとその間、家族の嘆願に抗しきれず許してしまう自分の甘さを知るからである。
 - ④ 島津侵攻の折り、内応者の入田宗和義実を再三にわたり真偽を確かめたが結局裏切られた。「貴殿に対し、裏切りのうわさが絶えないが、私は信用している。その証をみせてくれ」に対し「私の気持ちはいささかも変わらない。信用してほしい」と言った起請文のやりとりを3、4回しており、その間、入田は島津に対しては、宗麟とのやり取りを伝え、豊後侵入のタイミングを知らせている。さらに豊後南郡衆へ島津方につくよう呼びかけてもいる。この人物は、二階崩れの変の首謀者とみられ、宗麟から誅罰された入田親誠の長男である。
 - ⑤ 新しい国はキリスト教を基本とするも、日本の習慣を取り入れたものでなければならない。
 - ⑥ キリスト教になって日向で神社仏閣を焼き払ったが、同時期、高野山と手紙のやりとりをしており、その関係は断っていない。
 - ⑦ 我々(宣教師)のためにさまざまに便宜を図ってくれるが、そのうちわずかな不満を述べることにしている。そうすれば国主が喜ぶことを我々は知っているからである。
 - ⑧ 後世、不評をかこった宇佐八幡宮焼き討ちは、宗教観からではなく戦術面からやむを得なかつた。
- ◆経済大名大友宗麟／戦国時代の英傑織田信長は、土地経済から重商経済に転換を図った。楽市楽座＝自由市場である。この背景には海外貿易の拡大があった。当時の戦国大名で海外貿易を

重要視したのは宗麟をはじめ、松浦や大村、毛利元就の西国大名のほか、織田信長、すこし遅れて秀吉、家康、そして伊達政宗あたりだろう。ヨーロッパからみれば、宗麟は信長に匹敵、あるいはそれ以上の存在だった。ドイツのヴァイセンシュタイン城に「ザビエル、宗麟に謁見」の絵画が残る。

◆**織田信長との交流**／信長が美濃を攻略し「天下布武」を標榜した1567年、宗麟は高価な漆の名盆を贈り、信長からは、名馬「鬼月毛」が贈られた。お互いを認め合っていた節も見える。毛利との和平に信長は將軍義輝やそのあと義昭とともに一役も二役も買っている。

1581年、ヴァリニヤーノは宗麟の親書を携えて安土城の信長を訪ねた。既にこの時期、宗麟は信長を天下人にふさわしいと認めていたのだろう。

◆**宗麟の芸術文化**／宗麟の文化的趣向は非常に高く、また蒐集癖が強かった。そんな欲求は博多の豪商、島井宗室や神屋宗湛らの付き合い叶えられた部分が大きい。彼らは中国・朝鮮との貿易で巨利を得ており、文化芸術面の造詣も深く様々な文物を所持していた。宗室は臼杵にも来ており、宗麟との交流を深めていた。茶の湯も然り、茶人として千利休との交遊もあった。

宗麟は戦国時代の文化人といってよい。さらに家臣にも影響を与え、豊後に宗麟を中心とした文化的サロンさえ形成されていたことが分かる、と外山幹夫は自著『大友宗麟』で述べている。

※博多商人の貿易は、「大友氏の名を借りて」という面も無視できず、博多の大商人が宗麟を大切にしたのも宜なるかなである。

大友氏概観

◆**大友館の日常**／大友家の重要事項は、数人の加判衆の会議で決定する。大友館では毎日昼間に会議が行われていた。当主・宗麟が出席することはめったになく、申し次職が両者の意志を伝えるのである。宗麟の意志を文書で伝えるのが右筆。加判衆、申し次衆が宗麟を取り巻く重臣たちで、決まった数ではなく、各5～7人。ときには右筆衆まで含めた総数15～20人くらいが中枢を占めた。

そのほか椀飯奉行、酒奉行、寺奉行、社奉行などの奉行衆。さらに猿楽衆といった芸能集団や、桶結御作(おけゆいみつくり)、漆師御作(ぬしみつくり)、儀式用のかわらけを作る土器作(かわらけつくり)などの技術集団がいた。それに奥を取り仕切る奥方付きの侍女たちがいた。さらに言うまでもなく館を警護する役人たちがいて、この大友館には常時数百人が勤めていたと考えられる。ただし、日向敗戦直後の一時期、府内館は田原紹忍と数人の家来のほか、昼間でも人の気配がなく閑散としていた、とフロイスは伝える。

◆**大友家の政庁は府内から臼杵へ**／宗麟が政庁とした府内の大友館での生活は、1550年から1562年までの12年間。1562年以降は臼杵の丹生島に以前からあった城を整備し移り住んで、そこを政庁とした。1574年から1578年の4年間は義統への家督譲渡の移行期間で二元政治が行われた。その間以降は府内が政庁でなければならないが、宣教師らは、義統の統治能力の欠如とキリスト教の迫害からずーっと後まで「豊後の政庁は臼杵」であると記述している。しかし、「当家年中作法日記」によると、宗麟が府内館に儀式や会議で出向むき、臼杵城に帰る際は「帰庄」と記す。“庄”とは“自宅のある所”的意味である。家督継承後、宗麟親子の意識はあくまでも政庁は府内であった。